九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

分終止形式から見た荘子抄の成立

古田，雅憲
九州大学大学院（修士課程）

https://doi.org/10.15017/12031

出版情報：語文研究. 55, pp.29-38, 1983-06-05. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

文終止形式から見た荘子抄の成立

古田雅憲

荘子抄の諸本については、土井家蔵本（十巻五冊写本、続抄物資料集成第七巻所収）、寛永年間の古活字本、正保二年版本、足利学校遺跡図書館蔵本などの存在が報告されている。[1] そのうち足利本は関東語脈の抄物のようだが、[2] その他の三本については系統を同じくするものとのことである。[3] それら後者の系統の荘子抄（以下に「荘子抄」と言うのはこちらのものである）が土井家蔵本（以下には「土井本」と称する）で言えば、第二冊四二丁裏＝巻四途中＝を境として前半部が「ゾ体」、後半部は「ナリ（也）体」という体裁をとることはよく知られているところかと思う。

このように一風変わった姿を説明するのに、

①講述の手控と、その講述の筆録に基く聞書とが何らかの理由により相補われた（もちろん、前半を聞書、後半を手控とする）。

②その手控を成し、講述を行なったのは清原宣賢で、聞書はその講述の筆録をもとに誰人かが成したものである。

といった立場が説かれている。[4] なるほど「ベイ・ベシイ対ベシ」や「マイ・マジイ対マジ」などといった対立が前・後半部の間に見られ「ウズ・ウズル」「サフ（候）」なども前半部にしか見えないようである。また筆者が動詞の音便について調べてみたところ、次のような数値を得た（表中、「イ・ウ……」はそれぞれイ音便形用例数、ウ音便形用例数などを示し、「音一非」とは上段が音便形用例総数、下段が非音便形用例総数を示す。また「%」は各行の全用例数に占める音便形用例数の比率＝音便率と称す＝を示す）。

これらの表を見る限り、例外はあるものの、巨視的には後半部より前半部での音便率が高い傾向にあると言ってよかろう。確かに前半部は後半部よりも全般的に口語的色彩に富んでいるということは言えそうなところである。

しかしながら、そのような荘子抄前後半部間の差違が「聞書」と「手控」との差になるかと言えば、それは一考要するところであろう。というのも以下に示すような若干の疑問点が見出されるからである。

その一は奥書の記載に関するものである。

土井本には数ケ所に奥書が見えるのであるが、そのうち、前半＝ゾ体＝部分に属する巻一末、後半＝也（ナリ）体＝部分に属する巻

四、五末のいずれにも「〱講之」という記載を見る。この表現はある抄物を講述の手控と考える一証ともなるものという。[5] そうすると、同じ立場（手控製作者側＝宣賢）で書かれた識語が、本来別個の人間の手に成るところの手控と聞書とに渉って現われることになってしまう。

それに対して、聞書と手控とを取り合わせる際に、手控に有った奥書だけを取り込んだという解釈も成り立たないではないがいかにも苦しい。むしろ、前半部は聞書ではないと考えた方が自然ではな

〈前半〉

%	音/非	ータ（リ）					ーテ					
		非	撥	促	ウ	イ	非	撥	促	ウ	イ	
95.7	67/3	2	—	3	—	16	1	—	8	—	40	カ
100.	10/0	—	—	—	—	1	—	—	—	1	8	ガ
14.6	14/82	12	—	—	—	4	70	—	—	—	10	サ
100.	74/0	—	—	1	—	—	—	—	73	—	—	タ
100.	2/0	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	ナ
88.2	30/4	1	—	—	12	—	3	—	—	18	—	ハ
70.	14/6	—	4	—	1	—	6	8	—	1	—	バ・マ
86.1	118/19	2	—	40	—	—	17	—	78	—	—	ラ

〈後半〉

%	音/非	ータ（リ）					ーテ					
		非	撥	促	ウ	イ	非	撥	促	ウ	イ	
77.5	45/13	5	—	—	—	3	8	—	2	—	40	カ
100.	7/0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7	ガ
2.8	3/103	21	—	—	—	—	82	—	—	—	3	サ
97.2	138/4	—	—	—	—	—	4	—	138	—	—	タ
0.	0/1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	ナ
95.2	40/2	—	—	—	8	—	2	—	1	31	—	ハ
50.	9/9	1	—	—	2	—	8	4	—	3	—	バ・マ
55.2	106/86	14	—	3	—	—	72	—	103	—	—	ラ

かろうか。前半部は、今日後半部としてしか姿を留めない宣賢の抄（手控）を下敷にして作り出された抄なのであって、その製作時に元々の宣賢の抄に有った奥書をも取り込んだのではないかと考えるわけである。

その二はサ行四段動詞の音便に関するものである。先に荘子抄の動詞の音便について一覧したが、そのサ行について見てみると、後半部よりも前半部の方が高い音便率を示していることは他の各行とほぼ同様なのであるが、前半部に於けるイ音便形の数値は、他に比べると極めて低いものと言わなければならない。

参考の為に毛詩抄の様子を調べてみた。ここでは大方の傾向を知ればよいので、便宜上、山内洋一郎氏作製の索引（抄物資料集成第七巻所収）に依り、刊本（同第六巻所収）を資料とした。その結果58語について、イ音便形226例、非音便形35例を数えた。音便率にして86・6％という値はかなり高いものと言ってよかろう。ちなみにサ行イ音便については拍数、アクセント型、語構成などの上から、音便するか否かの区別原理が当時、中央の口語に存したと言われている。[7] そのような観点から整理してみると、指摘されている区別原理をほぼ忠実に反映しているのが認められた。つまり毛詩抄は、この点に関して当時の口語をかなり忠実に反映していると言ってよかろう。

ところで、毛詩抄が清原宣賢講の筆録を基に林宗二らが成した聞書であることは周知の通りである。そうすると、従来の解釈では荘子抄前半部も宣賢講に基いて成った「聞書」とされているのであるから、この両抄物は同一講述者に依りながら、一方は口語をよく反映し、一方は反映しないということになる。

毛詩抄が基いた講述の講述者が宣賢であることは動かないものであるし、荘子の講述があり、その講述者が宣賢であったろうこともその推察に疑いを挟む余地は無さそうである。また、宣賢が詩経の講と荘子の講とで語り口を変えたとは思い難い。従って問題があるとすれば、それは両抄物の製作者側に起因するものの筈である。つまり以下の二様の解釈が可能か。

毛詩抄、荘子抄前半部とも講述の場と関連する聞書であるとするならば、両抄物の差は、その作製上の意識ないしは態度の違いに依る、例えば毛詩抄は講述者の語りに忠実であるが荘子抄前半部はかなり変えてしまったなどと解することができるだろう。既に説かれているように、聞書であるからと言っても口語そのものである必要はないのである。[8]

もう一つの考え方としては、毛詩抄は聞書であるが、荘子抄前半部は講述および講述筆録とは直接的関係を持たずに成った抄であるというように、両抄物の成立事情そのものが違う為に差を見るに至ったと解する立場も許されよう。

要するに荘子抄前半部は聞書ではないとする余地もまだ残されているのである。

奥書からすれば、荘子抄後半部として姿を留める抄を手控とした清原宣賢の講述が行なわれたことは恐らく事実であろう。そして荘子抄前半部が口語的色彩に富んだ「ゾ体」抄物であるということも否めない事実である。

しかしながら、奥書の記載の問題、サ行イ音便の問題、更に、次に述べる、文末辞の不自然な分布などを考え合わせるならば、荘子抄前半部という抄物は講述及び筆録に基く聞書ではなく、それらと

の直接的関係を持たずに成った抄と考えて然るべきものではないかと思うのである。

さて以下に、荘子抄の特殊性を最も明確に示している文末の様子を見てみようと思う。前半部は「ゾ終止」七割強、「ナリ終止」一割弱、後半部は「ゾ終止」一分弱、「ナリ終止」六割弱となっている旨の指摘を見るが、[9] このような点に関していろいろと考えてみようというのである。

資料としては土井本を用い、各巻の首尾と中間の三箇所について各五丁分の調査を行った。便宜上、その一文に仮名が存した場合、その文末の状態の如何を数値の対象とした。なおその際に、少しでも後へ続きそうに考えられるものは続くと見なし、また、引用などの漢文注は数えないこととする。数え方に依っては数値に若干の変動が出るかもしれないが大方の傾向は動かないと思う。以下にその数値を示す[10]（括弧内の数値は、該当箇所に於いて、その形の文が占める百分率を示す）。

この表を見る限りにおいて次のようなことが指摘されようか。

③「也（ナリ）」で終止する文（以後也型文と称する）については、巻四首以前とそれより後とでは顕著な差がある。つまり前半部では最高でも巻四首の14・3％、他は一桁に留まるのに対し、後半部では最低でも巻五中の43・8％、残りは50～60％台の値を示している。

④「ゾ」で終止する文（以後ゾ型文と称する）についても巻四首以前とそれより後とでは顕著な差を認め得る。つまり、前半部で

		ゾ	0	也
巻一	首	156 (69.3)	50 (22.2)	19 (8.4)
	中	222 (76.0)	46 (15.8)	24 (8.2)
	尾	174 (73.7)	42 (17.8)	20 (8.5)
巻二	首	195 (73.0)	64 (24.0)	8 (3.0)
	中	138 (61.9)	73 (32.7)	12 (5.4)
	尾	128 (69.9)	42 (22.9)	13 (7.1)
巻三	首	153 (58.8)	90 (34.6)	17 (6.5)
	中	132 (60.6)	71 (32.6)	15 (6.9)
	尾	120 (60.9)	60 (30.5)	17 (8.6)
巻四	首	129 (63.5)	45 (22.1)	29 (14.3)
	中	1 (0.6)	61 (33.7)	119 (65.7)
	尾	2 (1.1)	67 (37.9)	108 (61.0)
巻五	首	7 (4.4)	63 (39.9)	88 (55.7)
	中	2 (1.7)	66 (54.5)	53 (43.8)
	尾	2 (1.1)	94 (53.1)	81 (45.8)
巻六	首	2 (1.3)	78 (48.8)	80 (50.0)
	中	0 (—)	94 (49.7)	95 (50.3)
	尾	1 (0.5)	85 (43.4)	110 (56.1)
巻七	首	0 (—)	83 (48.0)	90 (52.0)
	中	7 (3.6)	98 (50.5)	89 (45.9)
	尾	4 (2.7)	58 (39.7)	84 (57.5)
巻八	首	4 (2.5)	55 (34.8)	99 (62.7)
	中	1 (0.5)	82 (42.5)	110 (57.0)
	尾	4 (2.2)	76 (41.5)	103 (56.3)
巻九	首	5 (2.3)	91 (42.3)	119 (55.3)
	中	0 (—)	66 (47.5)	73 (52.5)
	尾	2 (1.1)	84 (46.1)	96 (52.7)
巻十	首	2 (1.8)	51 (46.8)	56 (51.4)
	中	1 (0.6)	61 (37.9)	99 (61.5)
	尾	2 (1.0)	87 (44.6)	106 (54.4)
序	前	0 (—)	21 (48.8)	22 (51.2)
	後	0 (—)	7 (20.0)	28 (80.0)

は最低でも巻三首が58・8％で、他は60～70％台を示すのに対し後半部では何れも5％以内に留まる。

⑤文末に「ゾ・也（ナリ）」の何れも現われない文（以後0型文と称する）については、巻四首以前の部分はそれより後に比べて小さな値を示す傾向にあるようだが、これは③④両項ほどの大差を見せない。

などの事柄が窺われよう。従来言われている通り、巻四途中に転換点が在って、前半ゾ体、後半也体という明らかな文体差が存していると言ってよいところであろう。

さてここで以上に示した数値を、毛詩抄及び毛詩聴塵について土井洋一氏が明らかにされたもの[11]と比べてみようと思う（表中、括弧内の数値は私に加えたもので、総計に占める、その型の用例数の百分率である）。

この表を見る限りにおいて、次のようなことが指摘されようか。

		毛詩聴塵 1-16丁		毛詩抄 1-20丁	
也	用言	155	346 (50.6)	4	22 (3.3)
	体言	153		16	
	助動詞	32		0	
	その他	6		2	
ゾ	用言	6	28 (4.1)	264	609 (90.2)
	体言	12		155	
	助動詞	6		166	
	その他	4		24	
用言		200	309 (45.2)	23	44 (6.5)
助動詞		96		5	
その他		13		16	
総計		683		675	

⑥毛詩聴塵については、也型文・ゾ型文・0型文の占める割合は荘子抄後半部の状態によく似ている。

⑦ゾ型文について、毛詩抄では90％を示すのに対し、荘子抄前半部では高くて76％、平均では66・8％でしかない。

⑧也型文について、毛詩抄と荘子抄前半部との間に大差は認められず、ほぼ似通った数値を示す。

⑨0型文について、毛詩抄では6％強を占めるに留まるが、荘子抄前半部では低くても15・8％、平均では25・5％にものぼる。

（これら⑥から⑨項のうち⑦については、既に土井氏の言及を見る。[12]）

すなわち、荘子抄後半部は毛詩聴塵の状態に同じであるが、前半部は聞書である毛詩抄と比べていろいろな違いを見せている。前半部は毛詩抄に比べて、ゾ型文の出現比率がかなり低いのであるが、也型文の比率は両抄物ともほぼ同じであるから、ゾ型文の低下分は0型文へまわっているとみることができる。

では何故、荘子抄前半部に於いて

(Ⅰ)ゾ型文の割合が低くなっていて、

(Ⅱ)その分、0型文の割合が高くなる

などといったことが起こるのか、という疑問に立ち至るのである。

以上に示したような問題を考える端緒を求めて、ここで蒙求抄に注目してみたいと思う。

蒙求抄の成立・諸本・系統などについては鈴木博氏に詳論がある。[13]

蒙求抄中、筆者の見ることが叶うのは抄物資料集成第六巻所収の古

活字版七巻七冊本である。これは鈴木氏に依ると、清原宣賢による享禄二年の講述に基いて林宗二が成したものに属する。その点では毛詩抄と同様の成り立ちなのであるが、筆者がここで敢えて蒙求抄に注目したのは次のような点を重くみたからである。

先の鈴木氏の論に依ると、この系統に属する蒙求抄中最善本とされる「両足院蔵の写本二種（存三冊本、存四冊本）などの「馬安」（七冊本巻五44裏）の右に次のような注記が見られるという。

馬安伝ヨリ聞書ナシ。梅屋抄、并、真座主聞書、并、首書ヲモツテ補之。（句読点、鈴木氏）

これは鈴木氏が説かれるように、馬安伝以後は宣賢の講義を筆録したものがなく、梅屋抄や真座主聞書（先の存四冊本は「真首座聞書」としているという）や首書などを用いて補う旨を示しているのであろう。

氏に依ると、梅屋抄なるものは蒙求聴塵と比べると宣賢講に既にかなり引用されていたもののようであり、また、首書なるものは業賢書写の標題補注蒙求の上部等に宣賢が漢文で頭書を加えたもので所謂カナ抄物ではないようである。そして、真座主（真首座）聞書なるものについては宣賢講の聞書かと推定された上で、氏は蒙求抄を蒙求聴塵と比較せられ、「馬安」以後もそれ以前と同様、宣賢講に基いて成った聞書として大過ないと説かれる。

ところが筆者が蒙求抄の前半部（「馬安」より前）と後半部とを比較してみたところ様々な差を認め得た。例えば、前半の巻一、二では地の文での「候」をかなり豊富に見るが、後半の巻六、七では全く見ない。また比況の表現として、前半では「ヤウニ・ヤウナ（ル）」を専用しているが、後半では「如（ク）ニ・如（ク）ナ（ル）」をも多用する。また推量の助動詞では、前半の「ウ・ラウ」語形専用に対し、後半では「ン・ラン」が「ウ・ラウ」とほぼ拮抗して現われるなど。特に、地の文における「候」は、その使用者の、相手を意識した丁寧表現と考えられるので、その有無多少は講述という、語り手と聞き手とが実際に同席する場を経たか否かということと密接な関わりを持つであろうことから重要視されようか。[14] ともかく蒙求抄が首尾一貫して宣賢講述に基いて成った聞書であるとは思い難い一証ではある。

そもそも、宣賢講述の筆録と擬せられる真座主（真首座）聞書なるものの実は未詳である。先の鈴木氏の論に依れば存三冊本の中ノ下15裏（七冊本五35表に該当）に

真首座聞書 一義、沈ト云ヲ埋タカ水ニ入タカト云ミ。盛私云、恐非歟、又云（中略）。同前陵谷ツレニハ此碑ハ成マイ。（句読点、鈴木氏）

のような出典注記を見るという。この箇所は前半部（「馬安」より前）である。仮に、この真座主聞書が宣賢講述の筆録とすれば宗二は（自らの）筆録と併せて二種の講述筆録を用いて前半部＝聞書を作ったことになる。そしてこの箇所に真座主（真首座）聞書をわざわざ引いたということは、その内容が自らの筆録と異なっていたからこそであろうが、同一の講述を経たにもかかわらず、言葉はともかく、その内容に差が出ることがあるだろうか。可能性皆無とは言

わないが、そのように考えるよりも、むしろ宣賢講に基いて成ったのではない、先行注釈の一としての位置を与えた方が無理の少ない解釈だと考える。[15]

以上のことを考え合わせるならば、この蒙求抄という抄物は首尾一貫して講述に基いて成った聞書なのではなく、「馬安」より前は宣賢講述の筆録に基く宗二の聞書、それ以後は講述との直接的関係を持たずして、宗二が先行の諸注釈書を参看引用しながら作った抄という一種の取り合わせ抄物と考えて然るべきなのである。

		ゾ	0	也
巻一	首	151 (82.1)	12 (6.5)	21 (11.4)
	中	181 (91.9)	10 (5.1)	6 (3.0)
	尾	170 (98.8)	1 (0.6)	1 (0.6)
巻二	首	175 (87.9)	16 (8.0)	8 (4.0)
	中	139 (92.1)	11 (7.3)	1 (0.7)
	尾	106 (75.7)	14 (10.0)	20 (14.3)
巻三	首	121 (79.1)	10 (6.5)	22 (14.4)
	中	134 (86.5)	15 (9.7)	6 (3.9)
	尾	119 (74.8)	20 (12.6)	20 (12.6)
巻四	首	174 (93.0)	7 (3.7)	6 (3.2)
	中	136 (87.7)	14 (9.0)	5 (3.2)
	尾	165 (94.8)	6 (3.4)	3 (1.7)
巻五	首	132 (85.7)	17 (11.0)	5 (3.2)
	中前	155 (87.1)	22 (12.4)	1 (0.6)
	中後	101 (78.9)	12 (9.4)	15 (11.7)
	尾	81 (75.0)	13 (12.0)	14 (12.9)
巻六	首	96 (78.7)	16 (13.1)	10 (8.2)
	中	104 (67.1)	15 (9.7)	36 (23.2)
	尾	104 (76.5)	16 (11.8)	16 (11.8)
巻七	首	102 (72.9)	17 (12.1)	21 (15.0)
	中	91 (71.1)	20 (15.6)	17 (13.3)
	尾	87 (56.9)	40 (26.1)	26 (17.0)

そのような蒙求抄について、その文末の様子を荘子抄などと同様の方針に従って調査した結果、上の表に示すような数値を得た（表中、巻五の「中前・中後」はそれぞれ「馬安」の直前とそれ以後である）。

この表を見る限りにおいて次のような事柄が指摘されようか。

⑩也型文について、「馬安」を境として（中前と中後との間を境として）後半は最低でも8・2％、平均14・1％を占めるのに対し、前半では巻一首、巻二尾、巻三首尾の四箇所が例外的に高いが、他はどれも0・6～4％に収まる。

⑪ゾ型文について「馬安」を境として、後半は最高でも78・9％平均では72・1％を占めるに留まるが、前半では巻一首、巻二尾巻三首尾が例外的に低いが他はどれも85％以上もの値を示す。

⑫0型文については「馬安」を境とした前後の間に⑩⑪ほど明らかな差は認め得ないようである。

以上のように、いくつかの例外は存在するけれども、「馬安」を境として前後の間に文末の様子に差がありそうなところである。それらの例外にしても、例えば巻一首について、その也型文21例のうち14例が一表から裏途中までの「標題徐状元補注蒙求巻一」という表題の注部分に集中しているわけで、そのことを差引いて考えれば何ら例外とするに足らないものであろう。他の巻二、三の例外についてはそのような偏りを特に認め得ないが、やはり何らかの特殊な事情に依るのかもしれない。そのように考えれば、蒙求抄の「馬安」より前とそれ以後とで、言い換えれば講述に基く聞書と、講述とは直接関係のない抄との間で、文末の様子について、大まかに言って次のような傾向が認められそうである。つまり、聞書はゾ型文の比率が高く、言わば「ゾ」で終止することがほぼ徹底するのに対し、抄では也型文の増加に伴ってゾ型文の比率が低下し、言わば「ゾ」

で結ぶということが徹底しないといった傾向が存するようである。

指定辞「ゾ」[16]は主観的色彩が強く、常に聴者を意識した表現であると説かれたり、[17]講述専用の用語であると説かれていることを思う時、「ゾ」で結ぶということが抄物のスタイルとしてある程度確立していたにせよ、講述を実際に経た聞書に対して講述を経ていない抄に於いて、ゾ型文の出現の比率低下＝ゾ終止の徹底が為されない＝ということが見られるのは理屈の上からも容易に考え得るところではないかと思う。

以上に述べてきたような考え方が荘子抄前半部と毛詩抄との違いを考えるのに役立つのではなかろうか。

先に示したように両抄物は同一人物の講述に依るとされているにも関わらず、

(I)ゾ型文の出現率について、毛詩抄では90％以上であるのに対して、荘子抄前半部では平均66・8％という低い値を示す。

(II)0型文の出現率については毛詩抄では6％程度に過ぎないが、荘子抄前半部では平均25・5％もの値を示し、むしろ毛詩聴塵や荘子抄後半部に近い状態にある。

などの相違点が認められた。このIについて次のように考えることが可能ではないか。つまり、聞書と抄とではゾ型文の出現率に差があり、聞書では概して数値が高い＝ゾ終止が徹底されるのに対して抄ではその徹底が達せられないのであるが、毛詩抄は蒙求抄前半と同様、講述と直接的関係を持つ聞書であり、それに対して荘子抄前半部は蒙求抄後半と同様、講述との直接的関係を持たずに定った抄であるからこそ、両抄物の間でIのような差を見るに至ったのではないか。

先に述べた、奥書の記載に関する問題、音便に関する問題などを考え合わせるならば、荘子抄前半部については講述に基く聞書ではなく、それと直接的関係を持たずに成った抄であると考えるのが妥当である。

さて荘子抄前半部を以上のように見るとして、その製作は如何にして行なわれたか。蒙求抄後半は梅屋抄、真座主聞書、首書などの先行注釈書を参看引用しつつ作られたという。

ここでは荘子抄前半部が作られる際に参看引用されたであろう先行注釈として、荘子抄後半部という形でその姿を留める宣賢の抄（後半部が宣賢の抄であることは土井氏の御指摘[18]のあるところであり、文末の状態、動詞の音便現象[19]が毛詩聴塵のそれとよく似ていることなどから見ても動かないところと思われる）を想定したい。というのも次のような例の存在による。

（第一冊1裏＝巻一）口義ハ口号ソクチスサミソ此モ後序ニア
（第五冊54裏＝後序）口義ハ口号也クチスサミ也・・・・・・・

ハ文ニテハナク賤イ俗ナコトヲマシヘテ注スルヲ云口義ハ世界
・文ニテハナシ賤イ俗ナ「ヲマシヘテ注スル・也口義ハ世界

リ此書以二口義一名者謂下其不レ為レ文雑二俚俗一而直述上レ文也言
・・・・・・・・謂　其不――――――――・

ニ云ロスサミ・テロニ任テ・スルト云心也
ニ云ロスサミニテロニ任テ注スルト云心也

このように似た表現が前後半に渉って存在するということは両者の間に何らかの関係を考えなければならないが、それが講述を媒介とする手控―聞書という間柄でないとなれば、荘子についての宣賢の講述が行なわれたのは事実としても、この荘子抄前半部はその講述（筆録）と直接の関係を持たずに、宣賢の抄を直接の下敷として何者かが作り出した抄であると考えることができそうである。

そのように考えると先の(II)の問題も解決の糸口が見えてくるのではないか。つまり、宣賢の抄では（荘子抄後半部の如く）也型文と0型文とが混在しているわけだが、それを基にゾ体抄物を作ろうとした際に、同じ指定辞として一つの注釈文の末に付す「也（ナリ）」については「ゾ」への置換えがスムースにいったけれども、何もない0型文については、その一部に「ゾ」が付されたにせよ、ほとんどの場合はそのまま取込まれてしまった為に荘子抄前半部の0型文はその比率に於いて、毛詩抄などに比べてずっと高く、むしろ毛詩聴塵や荘子抄後半部に近い値を示すのではなかろうか。[21]

以上に述べた事柄をまとめると次の如くである。

Ⓐ既説の通り、荘子抄後半部は宣賢の抄の後半部である。

Ⓑその抄に基いて宣賢の講述が行なわれたのは事実であるにせよ、荘子抄前半部はその講述との直接的関係を持たずに、宣賢抄を直接の下敷として作り出された抄であって、聞書であるとは思われない。

Ⓒその抄製作が何らかの理由に依って途中で放棄された為に、仕方なく取り合わせられた。つまり抄と抄との取り合わせ抄物が荘子抄である。

Ⓓその前半部製作者は定かではない。しかし巻一末にある「享禄三年三月廿五日於能州畠山左金吾義総亭講之六ケ度／一日ニ或両度或ハ一度／天文第二癸巳五月卅日　破関子宗和写之」という奥書から見て、前半部が成ったのは享禄三年以後であり、そのわずか三年後に写したのが宗和であることから、断定はしないまでもこの抄は宗和の手に成るものである可能性はかなり高いもののように思われる。

要するに、荘子抄前半部は宣賢の抄を中心に、恐らくは他の先行注釈も参看引用しながら作り出された宗和の抄と見なすことができるのである。言い換えれば、宗和が宣賢の抄を参看引用しながら「ウズ・ウズル」「マイ」などを用い、また、サ行では非音便形、その他の行では音便形を用い……などして作った口語的色彩を持つゾ体カナ抄物なのである。ただ、実際の講述を経なかったために講述専用とされる「ゾ」による文終止が聞書に比べると徹底しないというようなことが起きたが。

以上のように、文末の様子などを手がかりとして荘子抄の成立問題をめぐって若干の考察を試みた。

なお、このような立場からすれば荘子抄前半部の口語的色彩は必ずしも講述に依らないものである。そうすると抄物の口語的色彩とは一体何なのかというようなことが問い直されて然るべきではないかと思う。そのような問題に関しては現在検討中でもあり、次稿に

譲りたいと思う。大方の御批正を乞う次第である。

注

(1) 寿岳章子氏「抄物目録Ⅱ」(国語国文24ノ1)
土井洋一氏「宣賢講荘子抄の成立とその価値」(国語国文35ノ4)
(2) 小林祥次郎氏「足利学校本荘子抄の紹介」(国文学言語と文芸78)
(3) 前掲(1)土井氏論文
(4) 同(3)
(5) 大塚光信氏「史記抄について」(『抄物資料集成』第七巻)
(6) 前掲(1)土井氏論文
(7) 橋本四郎氏「サ行四段活用動詞のイ音便に関する一考察」(国語国文31ノ4)
奥村三雄氏「サ行イ音便の消長」(国語国文37ノ1)
(8) 大塚光信氏「抄物文」(『岩波講座日本語10・文体』)などで説かれるように、一体、抄物は先行する注釈、諸説を参看引用しながら為される注釈活動の産物である。注釈という行為はあくまで原典の思想・内容の理解、伝達が目的であるから、その表現に如何なる言葉が用いられるかは第二義的の筈である。従って同じ思想・内容の表現であっても、その抄物の作者が漢文を以てしようとすれば漢文体抄物ができ、俗語を混えた口語で著せば必然的にそのような抄物となる。聞書(それは講述という形で先行の注や説を享受して成った抄物と把えられる)の成立も同様であって、その思想・内容はともかく、その表現に使われる言葉は製作者側のものと考えられるのではないか。このような問題については稿を改めて考えたいと思う。
(9) 前掲(1)土井氏論文
(10) 上接の語や用法の違いなどによって文末の在り方が左右されるというようなことは特に認められないようなので、単なる数的な処理を行うに留めた。
(11) 土井洋一氏「抄物の手控と聞書」(国文学攷24)
(12) 同(11)
(13) 鈴木博氏「蒙求抄について」(『抄物資料集成』第七巻)
(14) このような問題については稿を改めて報告したいと考えている。
(15) この箇所を見ると、真座主(真首座)聞書からの引用に対しては、直後に「盛私云恐非歟」と宗二(安盛)は否定の見解を示している。一方、同様の事柄について述べた、その前の部分(宣賢講の筆録に依るであろう)には何らの批判も見ないことからすれば、この真座主(真首座)聞書は宣賢の講述(思想・内容)を反映したものではなさそうである。やはり宣賢講に基いて成るものではなさそうで、先行注釈の一と見た方が無難だろう。
(16) 春日和男氏「ぞとなりの消長」(『存在詞に関する研究』風間書房)
(17) 前掲(11)
(18) 前掲(1)土井氏論文
(19) 毛詩聴塵の動詞の音便については大塚光信氏(『岩波講座日本語10・文体』295ページ)に言及がある。数値化されてないが、それによると大方の傾向は荘子抄後半部のものと一致しそうである。
(20) 憶測の域を出ないが、抄物の文終止の在り方について禅門は「ゾ」、博士家は「也(ナリ)」といった学派意識とでも言うものが、宗二、宣賢らの時点に限っては存したのではないか。講述が「ゾ」で止められ、その筆録もその形式を受継いだにせよ、それを基に聞書として仕立てるに際しては、注釈の主旨からすれば原典の思想・内容を理解、伝達すればよい訳であるから、ゾ体であろうと也(ナリ)体であろうと良い筈である。然るに、講述を経て「ゾ」が出やすい環境下にある蒙求抄前半に於いては言うまでもなく、講述や筆録とは直接関係のない、言わば「ゾ」終止となる必然性のない後半部に於いても、その文終止形式が採られたということは補作者宗二に自らの抄物は「ゾ」で終止すべしの如き意識が存したのであろう。また、宣賢の抄物にはゾ体のものを見ないということである。そうすると、講述は「ゾ」で文が止められ、その筆録もそれをそのままに受継いだにしても、それを基に聞書を作る際には、禅門では講述ないし筆録の形式を受継いで徹底したゾ体、博士家は也(ナリ)体として著わし、抄を作るについても博士家は也(ナリ)体、禅門はゾ体を採ろうとする。が、禅門の抄については講述を経ていない故、他の影響をより多く受けて聞書ほど「ゾ」終止が徹底しないということになるのであろう。抄物を書き著わすという行為について右のような意識が存したのではないか。
さて荘子抄の成立について宗和の影の濃いのは土井氏の説かれるところであるが、筆者は前半部の作者として宗和を考えている。そうすると荘子抄前半部の成立について「也(ナリ)」から「ゾ」へという置換えはスムースにいったが、0型文はそのまま取り込まれたということが先の文終止についての意識の問題とからめて、うまく説明できそうに思われるのである。